10日間のパリ

野見山 暁治

のみやま・ぎょうじ
1920年福岡県生まれ、画家。52年渡仏、64年帰国。著書に「四百字のデッサン」「とこしえのお嬢さん」ほか。2014年文化勲章受章。

ルクサンブール公園のベンチに凭れて、噴水の揺らぐ光を眺めていると、時間から解きはなたれて、遠いところへ行ってしまう。

もう一度、こうしてぼんやりと過ごしたかった。

かなり逡巡したが、やはりやってきた10年ぶりのパリ。10日間の短い旅とはいえ、95歳、なにが起きても、おかしくはない。ここのところ、じわりと脚が弱ってきている。次の年はかなり覚束ない。

こうして、さっきから溢れる一条の光に目をやっていると、自分というものが戻ってきたような気分にひたる。どこに行っていたのだろう。

1950年代を、ぼくはずっとパリで過ごした。ルクサンブール公園にはいつも風がそよいで、人々の喧騒も、あたりのうっそうとした木立に吸いよせられて、まるで空気のざわめきのように心地よかった。ここにいると、いつでもぼくは自分の中に入ってゆけた。それは生きている実感といったらいいか。

昨日凭れていたベンチを見つけて、そこに座り込んだつもりだが、あれから60年あまりの歳月がたっている。目に見える景色が変わらなければ、時間は止まったままだ。

◎◎◎

この公園は、ぼくにとっても、3年ほど遅れてパリにやってきた妻のヨーコにも、素晴らしい隠れ家になった。冬、雪におおわれて誰ひとりいないこの公園に引っ越したと、フジタさんはそっとアドレスを知らせてくれたものだ。仕事を妨げてはいけないと、つい気兼ねしているうちに、とうとうあんな記念館になってしまった。

どうしてお元気なうちに訪ねなかったのか。しきりに日本を懐かしがっていた巨匠は寂しかったのだろうか。

ぼくは起きあがり、深い緑の中に紛れこんでゆくうちに、いろんな想いも消えた。

森をはずれると、眼下にぎっしりと家々がひしめいている。ホントかな。エッフェル塔が見えなかったら、これがパリの街とは気付かない。

◎◎◎

ぼくは老人になったのだろう。日本を発って1カ月の船旅で、ようやくたどり着いたパリ。その後、しばしば訪れることはあっても、ぼくのパリの記憶は、30代のころにけでの安逸を楽しむ。

久しぶりにぼくは公園の中にいる。人々と共存している、ある悦びに包まれた独りぼっち。

郊外にレオナール・フジタ邸を訪ねての帰り、回り道して入り込んだサン・クルーの森。

この丘陵は、見渡すかぎり公園だ。その勾配を埋めつくす木々は、四季それぞれの彩りが美しい。ところどころに、ぽっかりと空が落ちてきたような原っぱがある。

ぼくは寝ころんで、さっき訪ねたフジタ邸のことを想った。ずっと暮らしていたパリから、このいい白い世界を、転げるように走りまわったりもした。

日本には公園がない。公園と称する公共の広場がある。日本ではそれぞれが自分の住み家に庭をつくって、他から区切られた景色を囲み、一家だけの安逸を楽しむ。

田舎に引っ越したと、フジタさんはそっとアドレスを知らせてくれたものだ。仕事を妨げてはいけないと、つい気兼ねしているうちに、とうとうあんな記念館になってしまった。

どうしてお元気なうちに訪ねなかったのか。しきりに日本を懐かしがっていた巨匠は寂しかったのだろうか。

ぼくは起きあがり、深い緑の中に紛れこんでゆくうちに、いろんな想いも消えた。

森をはずれると、眼下にぎっしりと家々がひしめいている。ホントかな。エッフェル塔が見えなかったら、これがパリの街とは気付かない。

◎◎◎

ぼくは老人になったのだろう。日本を発って1カ月の船旅で、ようやくたどり着いたパリ。その後、しばしば訪れることはあっても、ぼくのパリの記憶は、30代のころにさかのぼる。

ピカソ美術館にも行ってみた。ピカソとジャコメッティの2人展。

モンパルナスの画材屋で、ぼくが僅かの絵の具を、いちいち吟味しながら買っている横で、ピカソが、どさりとカウンターに筆を置いたのには、びっくりした。

やはり、モンパルナス界隈のキャフェで、ジャコメッティをよく見かけた。混んでいて、同じテーブルに座ることもあった。じっとしていられないのか、すぐにも目の前にあるコップでもなんでもスケッチする。ぼくの顔も、生きた静物のように見据えていた。

ジャコメッティに「歩く人」という作品がある。針金みたいな細い両脚が、前後に大きく開いた、ただそれだけ。これは彫刻といえるのか、奇妙だなあと、ぼくは見るたびに思う。

目的地に向かって進んでいる、まさに「歩く人」以外の何ものでもない。それを眺めていると、どうしてぼくたち日本人には、目的に向かっての、ひとつの姿勢というものがないのかと思う。雑多な行為や思いが同時に入り混ざって、一つの形を示さない。

以前、パリの女性には、ある特有の気取りがあった。それがどうだろう、かつてのエレガントさを捨てた訳ではなかろうが、「歩く人」になっている。男と同じ姿勢に変わっている。世の中進んできたはずだが、男の社会が脅かされているのではあるまいか。世界のグローバル化によって、この先どうなってゆくだろう。マダムもマドモアゼル（お嬢さん）もジーパンをはいて、秋の風を受けながら、大股で通り過ぎていく。

◎◎◎

ずいぶんと肌色のちがう人も増えた。以前からいろんな人種はいた。しかし、あの当時、ぼくも含めてエトランゼ（外国人）はこの国にあこがれ、倣おうとした。ぼくらを抱きこませる力が、この国にはあった。

寄る辺ない民がどっとやってきて、そんな余裕もなくなっているのかもしれない。パスもメトロも人であふれていたが、これだけは言っておこう。爺のツラをしたぼくを見ると、だれもが競うように席を譲ってくれた。ありがとう、パリ。

掲載日 2016年12月18日 日本経済新聞 朝刊 32ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。